九州大学学術情報リポジトリ Kyushu University Institutional Repository

貞室の貞徳追慕:「貞徳居士十三回忌追福之俳諧十 三百韵」を紹介して

雲英, 末雄 ^{星稲田大学教授}

https://doi.org/10.15017/4741979

出版情報:雅俗. 10, pp.2-15, 2003-02-25. 雅俗の会

バージョン:

権利関係:著作権保護のため論文中の図は非表示

貞室の貞徳追慕

「貞徳居士十三回忌追福之誹諧十三百韵」

を紹介して ―

雲

英

末

雄

のは門下の正章(貞室)である。そのうえ正章は いた『貞徳終焉記』を草し、追悼の独吟百韻を興行した 花咲の宿を中心にその晩年や逝去・葬送のことなどを描 は、承応二年(一六五三)十一月十五日八十三歳で逝去 した。貞徳逝去後、いち早く、貞徳が余生を送った五条 近世初期文壇の中心人物、貞門俳諧の主導者松永貞徳 追悼のため同月下旬には「貞徳老人追善独吟」とし

て千句の大作をなした。更に年末には 師にも親にも別れ侍りしとしのくれに世中よ

わらはきて歎きこり交るとし木哉 ろづあぢきなかりしかば

貞

室

の句を詠じた (玉海集)。

ある。さらに翌承応三年になると、歳旦三つ物の発句に、 (小高敏郎『松永貞徳の研究』至文堂、昭和28年)ので いにし年長頭丸(貞徳)より誹諧の道

ゆづりはの名をうけし事

人気なき身のかざりわらとも

接とめてけふぞめいぼく花の春 おもひなし侍る心を

と詠んで貞徳の後継者であることが事実であるかのごと く誌し、翌承応四年の歳旦三つ物では貞徳の一字をとっ

ĪĒ.

章

が称したことには、貞徳門人の間から異議が出されるこ を詠んでいる。貞徳の跡目を継承して花の本二世と貞室 て貞室と名乗り、「年徳や佐保姫君の産のかみ」の発句

かな)魚川こ花のは二世にして守功してゆい。とになるのだが、貞室はそれらの異議には耳をかさず、

かなり強引に花の本二世として行動してゆく。

周忌や三周忌の様子が発句の詞書などに示されている。ここでも貞室やその門下の人々による貞徳の百ヶ日や一行され、令徳編の『崑山集』に匹敵する一大撰集だが、貞室編の『玉海集』は明暦二年(一六五六)八月に刊

先師死去百ヶ日の追善に

飲食の百味にめぐる春日かな

貞

室

それらを示してみよう。

が興行されたものと思われる。年二月下旬のことになり、恐らく右の貞室の発句で連句年二月下旬のことになり、恐らく右の貞室の発句で連句これは、百ヶ日追善だから、貞徳逝去の承応二年の翌三

先師一周忌の追善に

数とるや弟子等は数珠の玉霰

貞

室

う。百ヶ日同様貞室を中心として門下の人々によって追これは同じく承応三年十一月十五日の興行の発句であろ

独吟の可能性もあろう。 様連衆の具体的な俳人の名はわかっていない。あるいは

善の連句が興行されたものと思われるが、百ヶ日追善同

先師三回忌

真徳居士三回忌に貞室亭にて雪になく溝三歳やわがなみだ

正境量

貞

室

霜月日たてるはほどもなみだかな長頭丸第三回忌に

雪とふりし跡とふ友や三回忌雪とふりし跡とふ友や三回忌

たかな 摂州大坂梶山氏

物の引付に一句入集。また寛文五年(一六六五)の「貞では発句三が入集する。以後明暦三年の貞室の歳旦三つ

寛文七年の『玉海集追加』に発句五、付句二が入集し、 さらに寛文十二年の『続境海草』に発句が一句入集する。 徳居士十三回忌追福之誹諧十三百韵」に一座し(後述)、

貞室一門の古くからの門人といってよかろう。

興行が貞室やその門人たちによって挙行されたことは事 が行われたのかは、今のところ不明である。 実であるが、どの程度の人々が集まり、どの程度の俳諧 ともあれ貞徳の三回忌が貞室亭で行なわれ、追善俳諧

ことはまったく触れられていない。貞徳逝去後きわめて 管見に入った七回忌と十三回忌の俳諧興行に触れてみた までのものが収められているが、以後の追善俳諧興行 るまでの漢詩畑の人々の詩、 徳の年忌に何らかの行動を起こさないはずはない。 熱心にその追善事業を行なってきた貞室が、その後の貞 人々の作品が概述されているが、貞室については三回忌 第九章最晩年の第三節年忌に、 さきに引用した小高敏郎氏『松永貞徳の研究』には、 和歌や俳諧、 一周忌から二百回忌に至 狂歌の門人の 以下

句が数句入集している。『玉海集追加』冬之部に、 収録した一大撰集だが、そこに貞徳七回忌の詞書のある 年刊の貞室編『玉海集追加』は、『玉海集』以後の貞室 一門を結集させた発句二千百六十三、付句七百九十八を 万治二年(一六五九)が貞徳七回忌にあたる。寛文七

霜月十五日先師七回忌七百

韻興行して

霜月のもちも三世のちぎりかな

貞

室

貞徳居士七回忌冬懐

藤本氏

仙

ふるき世やしのびかへしの竹の雪

先師七回忌に

わすれめや雪とふりにししちねんき 貞徳居士七回忌七百韵興行

貞

室

せしに

埋火をとりて居士とふ香爐かな 『玉海集追加』付句中に、

貞徳追善七百韻のうち

また

11

貞 室

4

倫旨いたゞく僧はものしり

たびくくくねるどん太郎どの てくるまをしばしかしこにとゞめさせ 貞

とある。貞室の句の詞書によって、貞徳七回忌には、 韻が門下の人々と興行されたことが判明する。 貞室の発句 七百

は、『玉海集追加』にはこの一句しか入集しておらず、 ち素仙のものは、そのうちの一句であろう。素仙について はそのうちの三句であると思われるが、他の発句四句のう

するのみで、京都の人ということの他は伝未詳。おそら 他に万治三年の重頼編『懐子』に発句三、付句四が入集 く貞室に何らかの縁があって発句を詠んだのであろう。

十三回忌

十三百韵」の一軸が出現し、幸いに架蔵に帰することが いては、近時貞室自筆の「貞徳居士十三回忌追福之誹諧 寛文五年が貞徳十三回忌にあたる。この十三回忌につ

翻字をして、解説を加えてゆきたい。 できた。その一軸は本紙の大きさは縦一八・六糎、横一 一三・五糎で、 現在は軸装になっている。以下に全文を

> 貞徳居士十三回忌追福之誹諧 寛文第五乙巳暦霜月十五日先師

室

雪に侘の斎や一汁三さい忌 茶たうをたつる霜月の望

よむ経も冴る陀羅尼や勇施井 第二 底寒き井戸の水くみ華摘て

行者の袖は白妙の霜

岩橋のうへ下くだり月すみて

明星のちろめく影に起なれて 雪花やふるきをおもふ手向草 氷おしわりそ、ぐ閼伽桶

法の花やふる摩訶まだら衾雪

第四

池広み管絃の御舟さしつれて 鴦はさながら極楽の鳥

善入

5

十三百韵於貞室亭執行

正信

可頼

祐上

可頼

著作権保護のため図は非表示									

			28.48(3.4638.024)					(C) 25 T (C)	tron ores	777253
芭蕉のかぶを埋む雪霜 影もうつれよむ八軸のひもかゞみ 第九	犬毛いるて見や葛こ舎つらんつくえのうへの樒寒菊霜に煙る焼香箱もついしゆ哉	薬湯にとる谷水のいてとけて	隠居の園は冬の山陰茶の花にひがしや悼む今朝の霜	第七	谷の戸の雪は御簾まきあげて河風さむみさそふ伽羅の香	帝/〜も遠きを追や友千鳥	島 六 盤渉に吹ぬる楽もつい果て	跡ほどさゆる称名の声	門葉はかれぬ霜月の作善哉	第五
貞 正 本室 寿 」	佑 悔 長 上 焉 之	正的	貞 光室 俊		正 光量 俊	悔焉	正信	可頼	正量	
霜月のもちやきえにし丸の影散か、る木葉の道を掃除して	寒き木こをやむから虱骨をまもる魄はいづちへ雪の下第十三	取あへず鷹野の供奉に出せて権輿なかりし今朝の残雪	もとよりも爐につぐ炭やをき合せ第十二	耳の輪を過る朝風袖に落て	ふれるあられや瓔珞の玉 声さゆる頻伽のかいか空の月	第十一第一年	をはして日影でられくうつり来て 楽のひ、きも寒る朝風	みち布か営む法の場の霜	第十	唐門の脇に築山つきあげて
著 正 貞 英 信 室	貞 重 室 次	長 可之 頼	正的	貞室	正 善 寿 入	Ţ	E 長	定利		善入

霰の後の菩提樹の露

可頼

仏手柑の枝の朝風しづかにて

右凌老眼殊更及夜陰

おほし 空賢

嚢

はじめに貞室亭でこの貞徳の十三回忌追福之誹諧は興行はじめに貞室亭でこの貞徳の十三回忌追福之誹諧は興行なれたが、その住所は京都のどこであろうか。母利志朗されたが、その住所は京都のどこであろうか。母利志朗の「紙屋」の項に「三条通埋忠町」かぎや」とある店をの「紙屋」の項に「三条通埋忠町」かぎや」とある店をの「紙屋」の項に「三条通埋忠町」かぎや」とある店をの「紙屋」の項に「三条通埋忠町」かぎや」とある店をの「紙屋」の項に「三条通埋忠町」がぎや」とある店をの「紙屋」の項に「三条通埋忠町」がぎや」とある店をの「紙屋」の項目と、一大正をしてあるうか。母利志朗されたが、その住所は京都のどこであろうか。母利志朗されたが、その住所は京都のどこであろうか。母利志朗を出たが、その住所は京都のどこであろうか。母利志朗をしている。

始まるが、『玉海集追加』冬之部には、第一の百韻は十三回忌を「一汁三菜」に掛けた発句で

千三百韵興行し侍りて 先師十三回のいとなみに

雪に侘の斎や一汁三さい忌

の場で付けられたと思われるが、正信、可頼とつづくの脇、第三はあらかじめ用意されたものでなく、即興でそして重きをなす人物である。「脇、第三、当座」とあり、また第三は可頼が付けている。この両人は貞室の門弟と百韻が開始されてゆくのである。脇は正信が付けている。とある。ともかくこの発句を巻頭にして貞徳追福の千三とある。ともかくこの発句を巻頭にして貞徳追福の千三

正信は、寛文三年の『五条之百句』に「貞室門弟 可が自然に定まっていたのであろう。

と評される、そのすぐつぎに「室門弟(正信」として器用たり。句体も徳・室の風義にたがはず、作もつよし」在世の内にも切ニ徳門へ室と伴出て、会にも逢し人なり。頼」が「此仁今に室門へ出入して此道をはげます。貞徳

の両様が用いられている)で、歳旦三つ物を組み、万治が入集し、明暦三年以降貞室・可頼・政信(正信と政信が入集し、明暦三年以降貞室・可頼・政信(正信と政信と評されている。『知足書留歳旦帖』の承応三年に「縫屋と評されている。『知足書留歳旦帖』の承応三年に「縫屋せし人也。器用は可頼におとれり。とかくすき人なり」

貞室

ている。貞室の古くからのもっとも忠実な門弟といって 仙・貞室・季吟・安静・可頼とともに連衆の末席に加わ 承応二年一月に興行された『紅梅千句』では、貞徳・友 と同一人に認定したいと思う。ちなみに政信 二、付句二十四の入集なので、府類屋茂兵衛政信を正信 困しむが、『玉海集』で青地市郎右衛門の可頼が発句十 信と、府類屋政信が同一人かどうか、今のところ判断に 十入集の政信こと府類屋茂兵衛の可能性が高い。縫屋正 のメンバーの正信ではあるまい。むしろ発句十五、 左衛門として二句入集するが、これは貞室と歳旦三つ物 逝去したのかも知れない。『玉海集』では正信は樋口長 て長之が加わっているので、あるいは寛文五年の年内に ている。寛文六年にいたり、メンバーのうち正信にかわっ を経て寛文五年まで同じメンバーで歳旦三つ物を興行し (正信) 付句

物のメンバーとして残り、『歳旦発句集』には寛文七年・

は採録されていないので、あるいはこのころ俳諧活動を同八年まで歳旦句が収録されている。それ以後の歳旦句

句体も徳室の風義にたがはず、作もつよし」と絶賛してる。先にも引用したが『五条之百句』では、「器用たり。たのに対して、正信と同じく師に忠実に従った門人であ可頼は、北村季吟や荻野安静が貞室から離反していっ

短冊が模刻されている。発句の初出は慶安元年(一六四師手鑑』にも「賑ふや菖蒲のぼりに町くだり 可頼」の七五)の『糸屑集』に二句入集し、同四年の『古今誹諧止めたか、逝去したと思われる。発句は延宝三年(一六

にも発句が散見する。俳諧作者としてはまずまず活躍しでは発句二十八、付句五十五が入集する。その他の撰集続犬筑波集』では発句二十六、寛文七年の『玉海集追加』海集』では発句十二、付句二十四、万治三年季吟編『新

八)季吟編『山之井』に五句入集し、以後明暦二年『玉

向ひ腹 えられる。寛文九年の貞室の歳旦三つ物では、貞室・祐 る。それゆえ寛文期から貞室の門下に加わったものと考 愍でたつ御代の春 祐上」以下発句二十八句が入集す 手がかりはない。 の歳旦三つ物の発句である。祐上に関しては以上の他、 ん御代の春 寛文十三年のものにはメンバーに入っていない。また じメンバーで三つ物が興行されるが (寛文前後古誹諧)、 上・了味の三名で三つ物が興行され、同じく十年にも同 の人。伊東氏。寛文七年の『玉海集追加』に「黎民や憐 『歳旦発句集』の寛文九年の項には「賢聖や肩ならべ出 第二の第三を詠じた祐上について考えよう。祐上は京 祐上」の歳旦句が入集するが、この二句は前出 祐上」、同十年には「よろこぶや又此春と

第三の発句は、『玉海集追加』冬之部では、

貞徳老人十三回忌に

雪花やふるきをおもふ手向草

として入集し、同じく第四の発句も同集に、 先師十三回忌に

法の花や降まかまだら衾雪

として入集する。つぎに第四の第三を付けている善入に

ついて述べてみよう。

三年二月二十五日の貞室発句の「壬生天神社奉納百韻」 している。俳諧撰集『玉海集』に「とし徳のかみもらい として歳旦吟が入集。『知足書留歳旦帖』の明暦三年に正 付句九が入集する。貞室の古くからの門人といえるだろう。 『大和順礼』等に入集し、『玉海集追加』には発句十九、 元春らと一座。寛文期には『伊勢正直集』や『小町踊 に、正信。可頼・悔焉・宗隆・玄伯・恵佐・祐孝・正寿・ ある試筆哉 善入」以下十三句が入集。また万治 寿・善入・貞室、善入・正寿・貞室で歳旦三つ物を興行 句集』の承応三年に「年徳の神もらいある試筆哉 善入」 称善兵衛。京師東洞院ノ人。(下略)」とあり、『歳旦発 第五の発句は、『玉海集追加』冬之部では、 善入は、『誹家大系図』に貞室門として「山本氏。通

貞徳居士十三回忌貞室興行に

頼

門葉はかれぬ霜月の作善かな

とある。正量については、貞徳の三回忌の時にも貞室亭

で発句を詠んでおり、すでに述べたので省略する。

異色の存在であった。 異色の存在であった。 異色の存在であった。

『詩花集』では副田光俊がいる。現在のところ特定する 『詩諧捨舟』では藤井光俊、『天神奉納集』では金丸光俊、 阿名異人が多く、『時勢粧』『佐夜中山集』では山口光俊、 が入集するが、住所は不明、恐らく京であろう。光俊は が入集するが、住所は不明、恐らく京であろう。光俊は が入集するが、住所は不明、恐らく京であろう。光俊は が入り、『時勢粧』『佐夜中山集』では山口光俊、 第六の脇、第七の発句を詠んでいる光俊については、

ことはできない。

第七の第三を詠んでいる正的については、まったく手

貞徳翁十三年忌に第八の発句は、『玉海集追加』冬之部ではがかりがない。

霜けぶる焼香ばこも追修かな

長

には貞室・喜雲・了味で歳旦三つ物興行。同十三年にはと行なっている(寛文前後古誹諧)。さらに寛文十一年

六七四)にも歳旦発句を詠じており、その後も活躍した文十三年に貞室は逝去するのだが、了味は延宝二年(一貞室・重次・了味で歳旦三つ物を興行している。この寛

貞徳遠忌に第九の発句は、『玉海集追加』では付句上の箇所に、

と思われる。

影もうつれよむ八軸のひもかゞみ

芭蕉のかぶをうづむ雪霜

貞室

口庄兵衛のことであろう。以下『玉海集』では発句一、空は毎日子の日哉(野々口庄兵衛)以下三句が入集する野々とある。発句を詠んだ正寿は、『鷹筑波』に「五月雨の

三つ物が誌されている。 | 三つ物が誌されている。また歳旦三つ物では、『知足書留下諸氏と一座している。また歳旦三つ物では、『知足書留する。また万治三年二月壬生天神奉納百韻には、貞室以『砂金袋』では発句八、『玉海集追加』では発句五が入集

の追善俳諧興行のために上京したものであろう。追加』では発句十八、付句二十が入集する。敦賀からこ(野瀬)氏定利として発句四、付句三が入集し、『玉海集

貞徳居士十三回忌貞室千第十三の発句は、『玉海集追加』冬之部には、

三百句興行に

骨を守る魄はいづちへ雪の下

逝去すると、剃髪して貞恕と改名し、跡目を継承してい 重次・了味と歳旦三つ物を興行。その年二月七日貞室が 忌の折も京在住と考えたい。のち寛文十三年には貞室・ 文初年には上京していたものと考えられる。この十三回 されず単に「犬井氏重次」とあるところから、すでに寛 『玉海集追加』で重次は、地方在住者のごとく地名は示 集し、貞室門の中で重視されていたことがわかる。なお 入集。『玉海集追加』では発句五十三、付句四十四が入 以下発句七句入集。『玉海集』には同じく敦賀で発句十 『崑山集』に「つかりては風もぬる、や川柳 敦賀大井二郎兵衛 十三歳とすべきであろう。貞室生前中は重次の号を用い、

追加の発句は、 貞徳居士十三回忌に 『玉海集追加』付句上に、

霜月のもちやきえにし丸の影

著

英

追加」には「酔ていはふ酒や麹の花のはる 丹波福知住横山 とある。発句を詠んだ著英は丹波福知山の人で、『玉海集 あられの後の菩提樹の露 可 頼

以下発句二十三、付句六が入集する。その他『続山井』

室門の有力俳人といえるであろう。 が、著英の入句数が群を抜いて多く、著英はこの地の貞 して吉久・久重・見藤・重広・正通らの俳人が入集する 十四が入集する。『玉海集追加』では、丹波福知山住と に発句三、『誹諧鳥合』に発句二、『誹諧法農華』に発句

集追加』あたりに活躍が知られるようになるのは、祐上 利・重次と大部分を占める。それ以後寛文七年の のは、正信・可頼・善入・正量・悔焉・長之・正寿・定 明暦二年の『玉海集』あたりですでに門下になっている バーの略歴を述べてみた。簡単にまとめると、このうち 「玉海

以上、貞徳十三回忌俳諧興行の貞室亭に集まったメン

正量や悔焉らの存在も貴重で、妙法院家司正量は御所方 歳旦三つ物を興行しており、気心のしれた門人である。 とは、貞室と明暦三年以降万治を経て寛文五年まで毎年 しかも奇行の持ち主であれば何かと評判になり、貞室の への交流に便利だし、悔焉のごとく能筆で著名な学僧

光俊・著英である。正的は未詳。前者のうち正信と可頼

俳諧活動にとっても決してマイナスにはならなかっただ

ろう。また宮川松堅の兄と思われる長之の存在も、貞室

福知山の著英が出座しているのは注目すべきことであろなであろう。なおまた、越前敦賀の定利の出座は、地方たであろう。なおまた、越前敦賀の定利の出座は、地方なの俳人は、これからの貞室門をになってゆく上で重要をあることはいうまでもないが、ここでも地方から丹波であることはいうまでもないが、ここでも地方から丹波であることはいうまでもないが、ここでも地方から丹波であることはいうまでは、越前教育の出座は、地方となったであろう。それに、のちに貞には力づよい味方となったであろう。それに、のちに貞

直室は、真徳逝去後ただちに追善連句興行を行なった真徳追慕の名目で、年忌ごとに追善連句興行を行なってきた。その十三回忌の興行は、一大の古参や中堅あるいは新人らが結束して、しかも京に在のものだけでなく越前敦賀や丹波福知山の俳人まで参にのものだけでなく越前敦賀や丹波福知山の俳人まで参にのものだけでなく越前敦賀や丹波福知山の俳人まで参にのものだけでなく越前敦賀や丹波福知山の俳人まで参に直徳追慕の名目で、年忌ごとに追善連句興行を行なった真徳記』の執筆と追善独吟百韻の興行、さらに百ヶ日忌、一門まさに一つのピークをなしたものと思われる。貞室一門まさに一つのピークをなしたものと思われる。貞室一門は東京では、真徳追慕の本は、大きに追答を表して、まる。

山深い伊賀上野の地でも藤堂蟬吟公の発句によってとりれらの成果は二年後の寛文七年の俳諧撰集『玉海集追加』れらの成果は二年後の寛文七年の俳諧撰集『玉海集追加』中本七冊に如実に投影されているといってよかろう。な中本七冊に如実に投影されているといってよかろう。ない。なおまた蛇足ながら、貞徳十三回忌の追善興行は、さない。なおまた蛇足ながら、貞徳十三回忌の発句によってとりたのは、貞徳の多くの門人のなかでも貞室ただ一人だけたのは、貞徳の多くの門人のなかでも貞室ただ一人だけたのは、貞徳の多くの門人のなかでも貞室ただ一人だけたのは、貞徳の多くの門人のなかでも貞室によってとり

行なわれた。

貞徳翁十三回忌追善俳諧

注

1 塩崎俊彦氏は「貞徳自筆『貞徳終焉記』について――前田漪園旧蔵本をめぐって――」(『連歌俳諧で――前田漪園旧蔵本をめぐって――」(『連歌俳諧成11年)の内容を紹介し、「終焉」の語義から『貞成11年)の内容を紹介し、「終焉」の語義から『貞感終焉記』を読み直す必要を提言されている。「『貞門談林俳人大観』俳名索引』から多大な御学恩「『貞門談林俳人大観」俳名索引』から多大な御学恩で得た。記して御礼申し上げます。